

# 連携医療機関情報の定型ファイルと マップの活用状況と今後の課題

植村 悦子, 高階 聖美, 小竹 年人, 佐藤奈津子  
松原 俊輔, 五十嵐慶一, 古家 乾

北海道社会保険病院 地域医療連携室

Key Words :

地域医療連携・紹介率・逆紹介率・地域支援病院・かかりつけ医

## 要 旨

当院の地域医療連携室では、スムーズな逆紹介へ向けて、連携医療機関情報の定型ファイル化とマップ作成に取り組み、平成16年 2月から運用を開始した。運用後、患者用の持ち帰りマップ利用数は週平均117枚、逆紹介率は増加傾向ではあるが20%台であり、まだまだ当院が患者を抱え込んでいる状況と言える。そこで、運用後 1年が経過したマップとファイルの活用状況について、患者と医師にアンケート調査を行った。

患者の利用目的は「ただ何となく」が最も多く、かかりつけ医については「今後持ちたいと思っている」が27%であった。医師の中でファイルとマップの存在を「知らない」が23%で、「知らない」と回答した医師の勤務年数内訳は、「1年未満」が86%であった。

今後は、ファイル掲載情報の充実・新採用者オリエンテーションでの宣伝・『逆紹介率の向上』『かかりつけ医の推進』へ向けて患者・職員への更なる啓蒙が必要である。

## はじめに

当院の地域医療連携室では、スムーズな逆紹介へ向けて、連携医療機関情報の定型ファイル化とマップ作成に取り組み、平成16年 2月から運用を開始した。運用後、患者用の持ち帰りマップ利用数は、週平均117枚である。逆紹介率は増加傾向ではあるが20%台であり、まだまだ当院が患者を抱え込んでいる状況と言える。そこで、患者と医師に活用状況についてのアンケート調査を行い、今後の課題について検討したので報告する。

## 研究目的

運用後 1年が経過した連携医療機関マップとファイルの活用状況を調査し、今後の課題を明らかにする。

## 研究方法

- \*研究期間：平成16年 1月～平成17年 2月
- \*持ち帰りマップの印刷枚数を調査  
(平成16年 6月～平成17年 1月)

- \*運用前後の紹介率、逆紹介率を調査  
(平成16年 1月～12月)

- \*マップ利用患者と医師へアンケート調査

- ① マップ利用患者へのアンケート調査：

平成17年 1月26日～2月2日

持ち帰りマップ 1枚毎に患者用アンケート 1部をホチキスでとめ、持ち帰りマップの専用ラック横のアンケート回収箱にて回収した。

- ② 医師へのアンケート調査：

平成17年 1月26日～1月28日

当院の医師53名にアンケートを配布し、医局秘書に渡す、または病棟・外来の連携室 BOXに入れる、のいずれかの方法で提出してもらい回収した。

## 結 果

- \*持ち帰りマップ利用数：(図1)

最大週で280枚、週平均117枚である。

地域別では当院がある豊平区の利用が最も多い。

- \*運用前後の紹介率・逆紹介率：(図2)

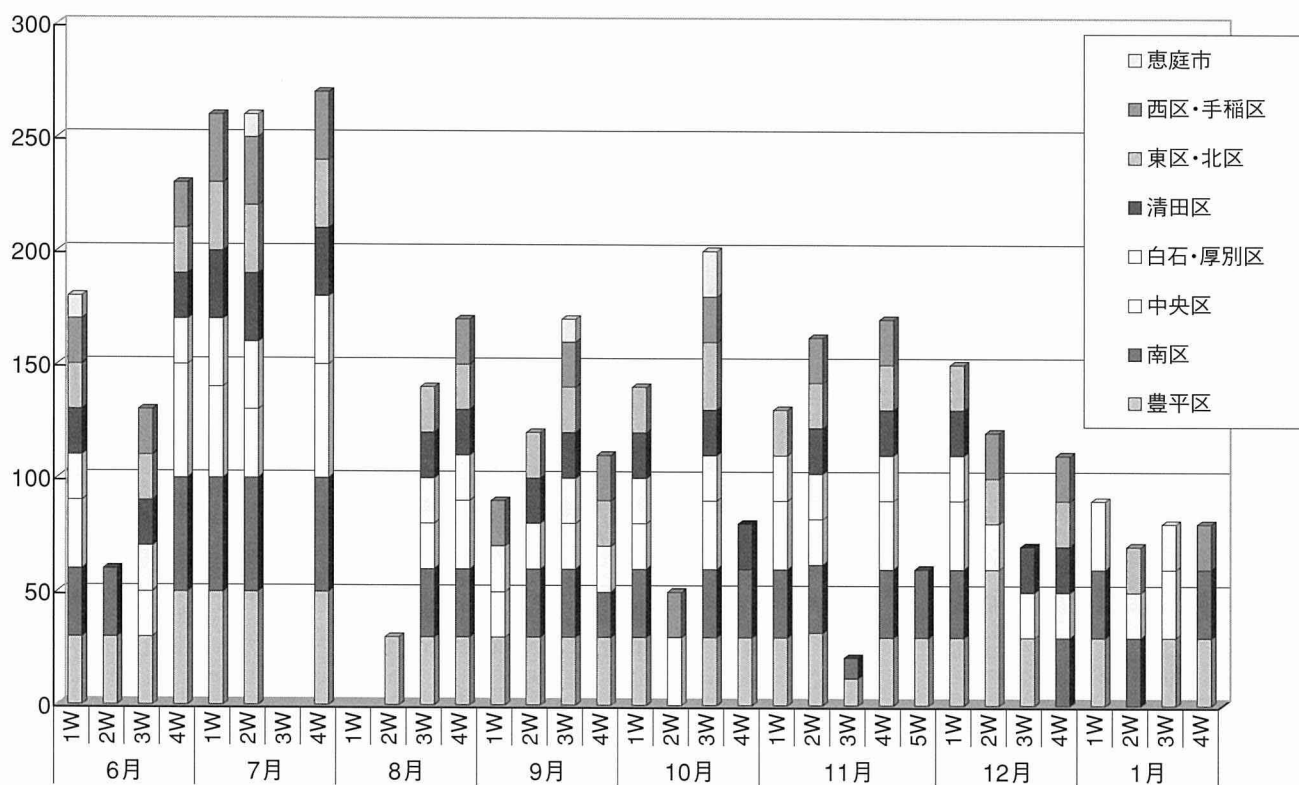


図1 持ち帰りマップ利用数

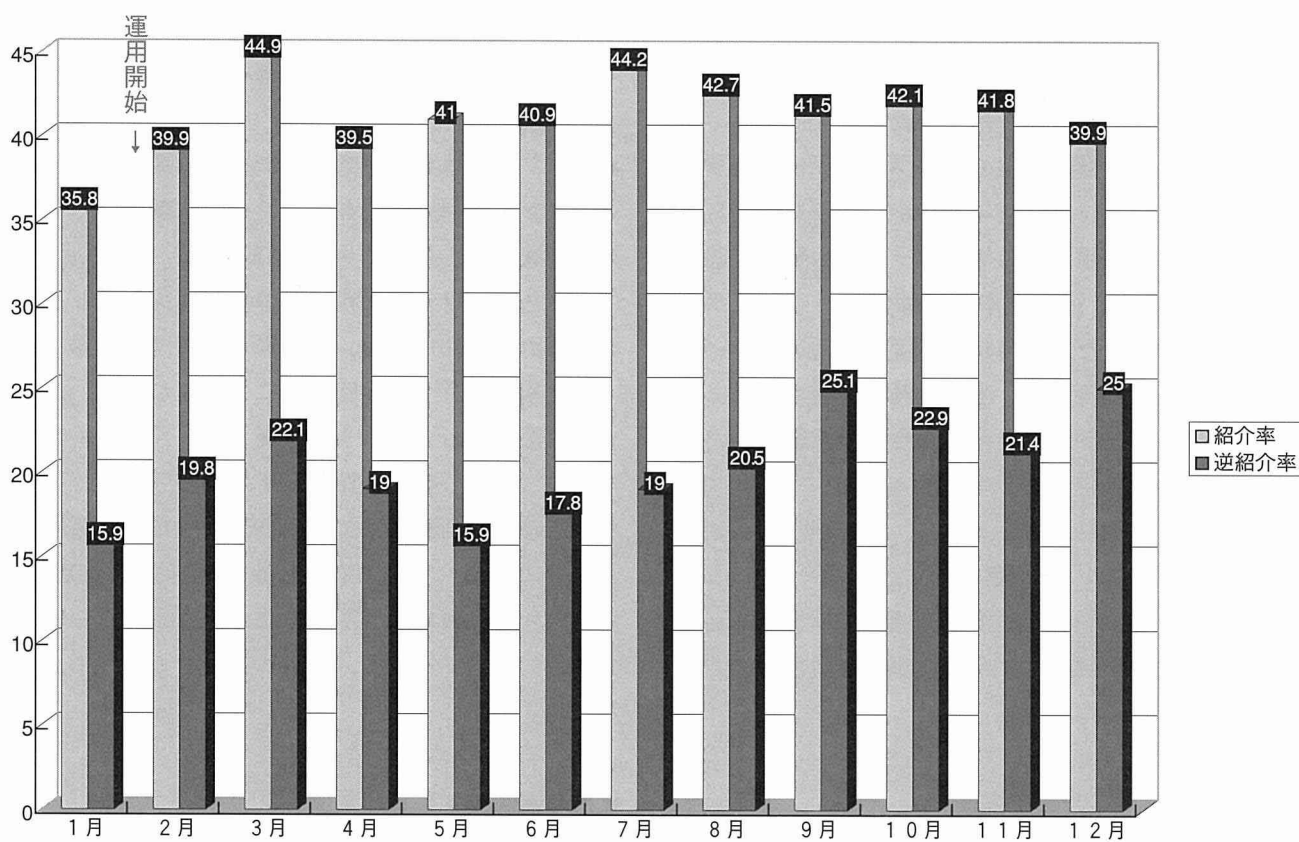


図2 運用前後の紹介率・逆紹介率

昨年の2月から運用を開始し、紹介率は運用前の1月は35.8%、運用後は39.4～44.9%である。逆紹介率は運用前の1月は15.9%、運用後は19～25.1%である。

＊マップ利用患者へのアンケート：（図3）

80枚配布し15枚回収、回収率は19%であった。

《マップ利用者の内訳》：「外来患者」が87%、「入院患者」が13%、「家族」「面会者」「その他」は0%であった。

《当院への受診経緯》：「以前から当院に通院していた」が60%と最も多く、次いで「紹介状無しで受診した」が27%、「紹介状持参で受診した」が13%であった。

《マップの利用目的》：「ただ何となく」が52%と最も多く、「近所の診療所を探したい」が27%、「かかりつけ医を探したい」「地図として利用したい」「その他」はそれぞれ7%であった。

《かかりつけ医について》：「言葉を聞いたことがある」が60%と最も多く、「現在は持っていないが今後持ちたいと思っている」が27%、「現在『かかりつけ医』を持っている」が13%であった。

《良い診療所が近所にあったら？》：「このまま当院に通院したい」が53%と最も多く、「紹介して欲しいと思っている」が20%、「その他」は27%であった。「その他」の内容としては、①現在かかりつけ医を持っているので、かかりつけ医の指示に従う②ずっと当院に通っており担当医師を信頼しているのでこのまま当院に通いたい③すぐに医師が交替する科については、もし近所に良いところがあったら通いたい、等の意見があった。

＊当院の医師へのアンケート：（図4）

53枚配布し31枚回収、回収率は58%であった。

《当院での勤務年数内訳》：「1年未満」が32%、「1～3年」が26%、「3年以上」が42%であった。

《連携医療機関ファイルとマップの存在について》：「知っている」が77%、「知らない」が23%であった。「知らない」と回答した医師の勤務年数の内訳は、「1年未満」86%、「3年以上」が14%、「1～3年」は0%であった。各々の勤務年数別でみると、勤務年数「1年未満」の医師の60%が「知らない」と回答しており、「1～3年」の医師は100%が「知っている」と回答、「3年以上」勤務してい

る医師の7%が「知らない」と回答していた。

《勤務場所での連携医療機関ファイルの置き場所について》：「知っている」が65%、「知らない」が32%、「見たことはあるが忘れた」が3%であった。《連携医療機関ファイルの利用の有無》：

「ある」が65%、「ない」が35%であった。

《ファイルを利用したことがある医師の利用状況（複数回答可）》：「診療所名・電話番号等を調べたことがある」が75%、「逆紹介の際に利用したことがある」が60%、「ファイルに収容してある『患者用診療所情報』を患者様に渡したことがある」が10%であった。

《患者様から連携医療機関についての質問・相談を受けた事があるか？》：「ある」が48%、「ない」が52%であった。

## 考 察

平成16年2月に運用を開始し、6月には「持ち帰りマップ」の利用枚数が週に200枚を超えるようになった。地域別で比較すると当院周辺の利用が多く、マップが『かかりつけ医の推進』へ向けての患者啓蒙の一助になっていると考えた。しかし、マップ利用枚数が多い割には、逆紹介率が伸び悩んでいた。

そこで、利用患者に「持ち帰りマップ」の意味を理解していただけるよう、平成16年7月から連携医療機関マップのそばに、かかりつけ医の説明パネルを掲示し、『かかりつけ医の推進』を心がけてきた。今回、マップ利用患者へのアンケートの中で持ち帰りマップの利用目的の第一位が「何となく」53%、という結果は、まだまだ働きかけが不足していると言える。

また、「近所に良い診療所があっても当院にこのまま通院したい」という患者が53%もあり、まだまだ、大病院志向が根強く残っている表れと言える。連携医療機関マップとファイルを作成する前に、どの診療所を掲載するか、院内の医師の意見・要望を把握する目的で、医師へのアンケート調査を行ったため、運用前後は当院の医師全員がマップとファイルの存在を知っていたと思われる。

しかし、運用後1年を経過した今回の医師へのアンケート結果では「知らない」医師が23%もいた。内訳では、当院での勤務年数が1年未満の医師の

60%が「知らない」と回答しており、今回のアンケート調査で初めて連携医療機関ファイルの存在を知り、「便利そうですね」と感想を述べていた医師もいた。また、外来での置き場所は知っているが病棟の置き場所は知らない、という医師もいた。

また、ファイルの存在を知っていても、利用した事がある医師は65%に留まっていた。

逆紹介の際に活用して欲しい「患者用診療所案内」（ファイル内に収容してある）を実際に患者に渡した事がある医師はわずか10%であった。

これらの結果から、今後は、毎年4月に新採用者へ域医療連携室のオリエンテーションをする際に、連携医療機関ファイルとマップの存在と、ファイルの配置場所・内容・活用方法等を、きちんと説明する必要があると考える。

アンケートの中で、当院の医師から、「良い診療所についての情報がたくさん欲しい」「ファイルに無い診療所からの紹介をよく受けるので掲載を検討して欲しい」「患者から自宅近くの総合病院への転院希望があるので、大きい病院の掲載を希望したい」「精神科を充実させて欲しい」などの要望があった。

当初は、『かかりつけ医の推進』『スムーズな逆紹介』へ向けて作成した連携医療機関マップとファイルであるが、今回のアンケート調査での医師の意見・要望を受けて、今後は、大学病院・総合病院・脳神経外科病院・形成外科・精神科などの情報を掲載し、診療所情報も増やす等、連携医療機関ファイルの更なる充実が必要である、と考える。

しかし、中には「ファイルの存在は知っているが調べるのが面倒なので、つつい地域医療連携室に電話で聞いてしまう。その方が早い」という意見もあり、看護師からの電話での問い合わせも多い。

こういった現状から、将来的にはパソコン上で住所や診療科、往診の有無などを入力すると希望に合った診療所・病院が即座に検索できる、といったシステムの導入が必要であると考えます。

連携医療機関マップとファイルの運用後、逆紹介率は増加しているが、20%台というのは、まだまだ当院が患者を抱え込んでいる状況と言える。

福田<sup>1)</sup>は『開業医が病院に望むこと』として、「紹

介患者は返して欲しい」「近所に患者がいたら逆に紹介して欲しい」「当院を宣伝して欲しい」等が挙げられる、と述べている。

また、藤田<sup>2)</sup>は、「連携相手が満足しない連携は長続きせず、真の連携とは言えない」と述べている。紹介率を下げない為にも、逆紹介率の向上は重要課題と言える。

医師へのアンケートの中で「紹介を受けた患者については紹介元にお返しする事が基本であると思うが、もともと当院に通院している外来患者の逆紹介をどの位すべきなのか？医業収益との絡みもあると思うが病院としての方針はあるのか？」という質問があった。これは、多数の職員の疑問でもあり、病院としての明確な方針を、管理者から全職員に示してもらふ必要があると考える。

そして、『医療連携は、職員全員で行うものである』という意識を、当院の全職員が持てるよう、院内連携を強化し、効果的な地域医療連携を推進していきたい。

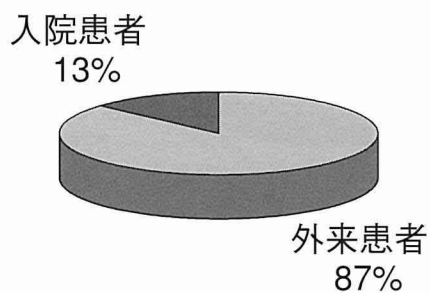
## 結 論

1. 連携医療機関ファイルには、診療所情報だけでなく、大学病院・総合病院等の情報も求められており、掲載情報の更なる充実が必要である。
2. 毎年4月に新採用者へ向けて、連携医療機関マップとファイルの宣伝が必要である。
3. 『逆紹介率の向上』『かかりつけ医の推進』へ向けて、患者・職員への更なる啓蒙が必要である。

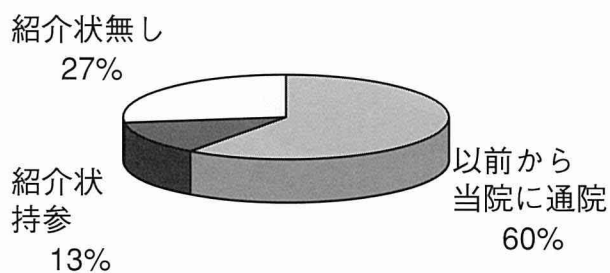
## 引用・参考文献

- 1) 福田明男：病診連携～ Step by Step ～  
日本看護協会主催「退院調整と看護」資料
- 2) 藤田拓司：効果的な地域連携が実現する体制づくり、さまざまな規模の病院のケースから学ぶ  
「前方連携」「院内連携」「逆紹介」の実際日総研主催「効果的な地域連携が実現する体制づくり」資料
- 3) 田城孝雄：地域医療連携 平成18年の大改革に向けて、日総研出版、2004

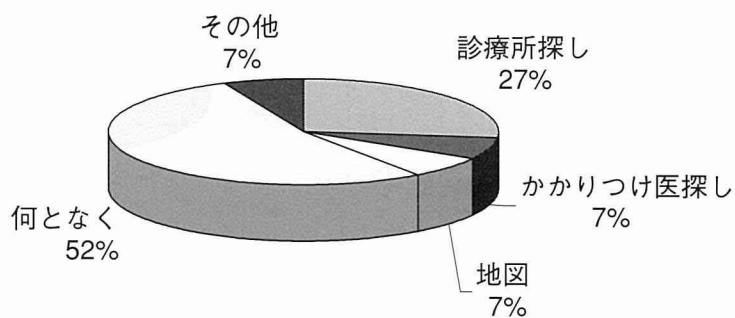
利用者の内訳



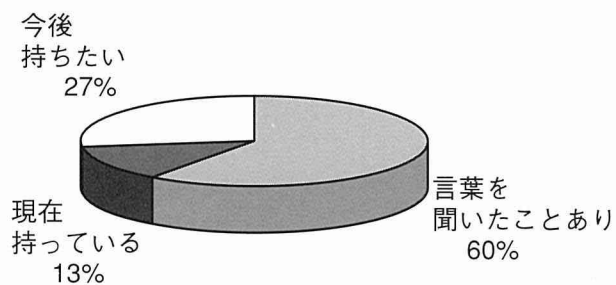
当院への受診経緯



マップ利用目的



かかりつけ医について



良い診療所が近所にあったら？

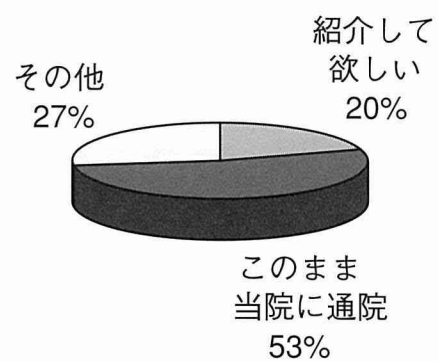


図3 マップ利用患者へのアンケート結果

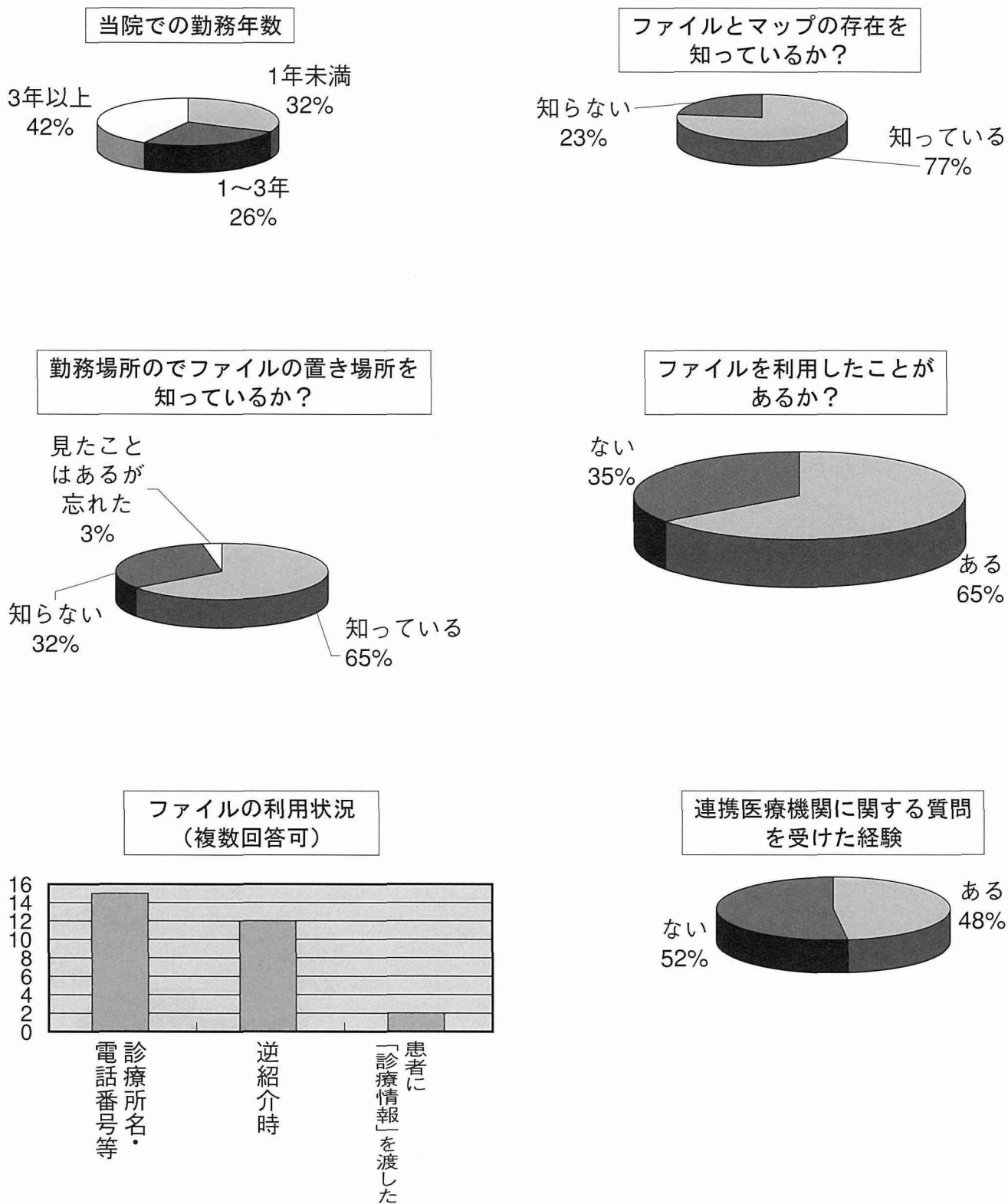


図4 当院医師へのアンケート結果